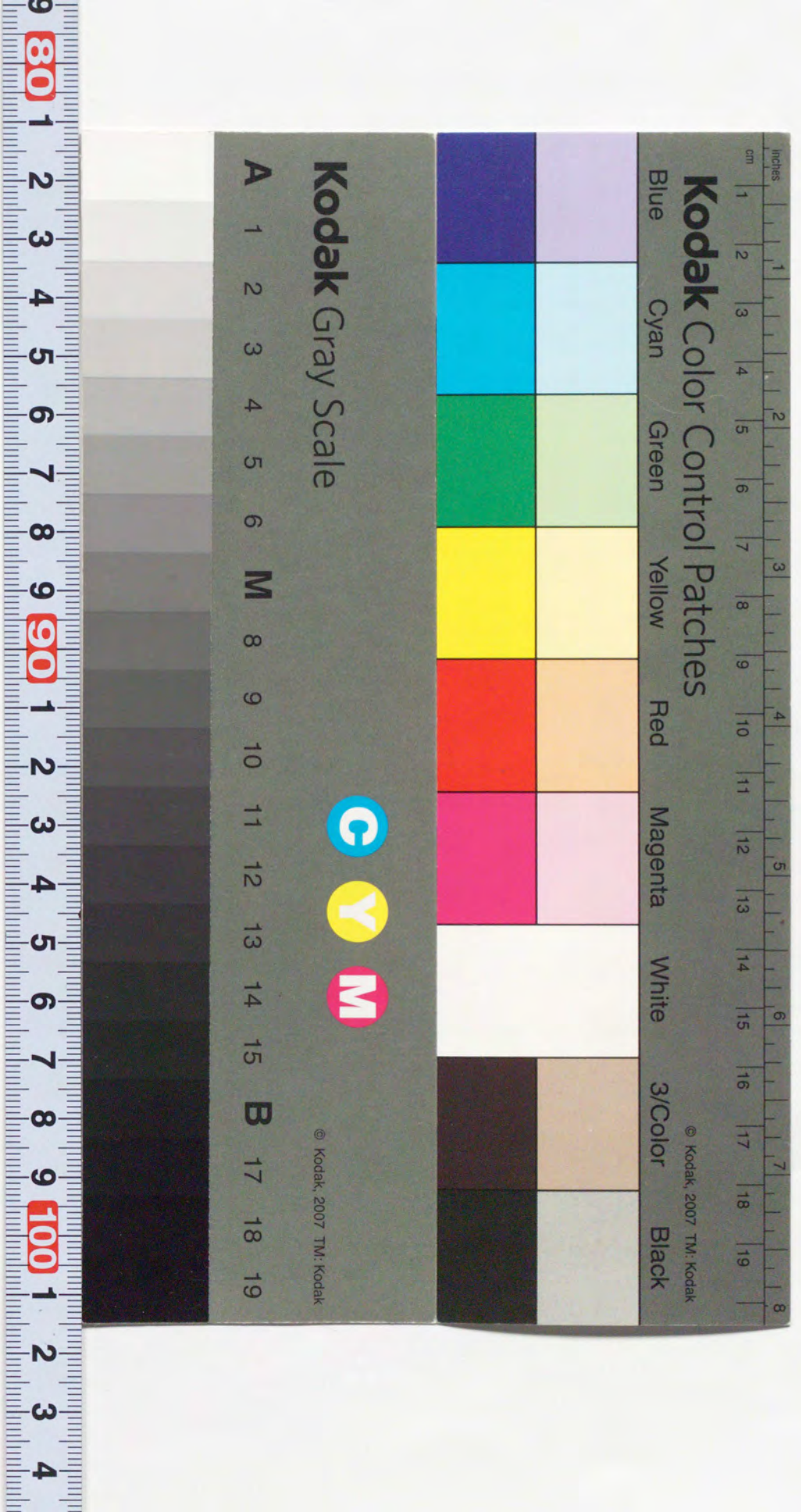




南總里見八犬傳第五輯卷之一

東都 曲亭主人編次

羣小を射て豪傑法場を鬧せ  
義士を渡して俠輔河水を投む

第四十四回

却説丁田町進、大塚の里老ホと召せし、卒川菴ハ、その里を基六が小斷  
額藏ハ主の夫婦を害し、逆惡既ハ明白なり、いんや又前陣代主役を扮する  
圓塚山の海をゆく、縣の人を殺し、その罪戾一はあつた、それより被罪六、昨日  
極刑は處せし、背介ハある日身あるを、これハ今、罪科の外、汝  
及、基六は汝ハ領措る、墓六が奴婢ハ罪ゆ、みだ舊里へ放遣せ、且墓六が  
莊園ハその家庫とも不没却せる、券書はよりて進呈せよ、又墓六が妻の甥、大塚  
信乃とある癖者ハ、額藏が支黨ニ竊ま、その往方と索めて、擲捕し、人の六



許して額藏を救ふ。俺門ハその宵のうと認るるめゆねども、越上濱路を  
 娶えんとく媒妁軍水共侶は莊官の宿所へ参り酒宴して夜を深せしめられ  
 趣ハ誰とてあぬめゆ。品草へあたりたまふ立あしどどのかみ酷  
 した証問あり額藏を不救ひぬ。犬塚の寛枉に争むとわが虎釋人  
 よお志あめいと鎌倉へ赴くまゝと二人が又一人三人四人と散動し果ハ過  
 トといふあやうと言語し罵駭ぐ。里老小推鎮めく入々不平の迹懐ハ寔なり  
 あるすかれども後今より夜を日と継ぎ鎌倉へ赴けども往返三十里を餘れぬ。  
 翌ハ誅せらるるゆ彼男を救ひて世の鄙語よめとあり。長兄物お巻入。  
 高た物やわらも屈るべ一虎斃れ一虎進む。敷上殿と下田殿と奸曲刻薄  
 甲乙や鎌倉を推参りて領主は愁訴されば之を用捨あは揃えぬ。六  
 甲陣代あり額藏ハ小厮主の讐を撃つるもさるる比罰あらん況く

救を身ハ罪せし妻子は歎息を送る。漫早りと後悔を利害を  
 諭せ。六里人ハ只管は温まらぬ。衆皆あはるる。合程は七月二日  
 ぬ。大が犬塚へ参りて。この日己の比及は町進ハ巷ハ社平五倍二を廳聚合て  
 行徳を船せし日。額藏を誅戮の隊配を示す。渠ハ幻術あは死めたり。卒川生を檢監  
 と。兵三千餘名をぬく。非常を警む。きのふ里老があはれとて  
 大えあはる事情を察する。日来額藏ハ魅されく。呪は親愛されぬ。  
 どうく遊行のめを禁め人の御するを許さる。其も亦武者汰く。城  
 外どうも巡り用心かくのどく。縦額藏幻術ありとも。刑は臨て術を施す。  
 うあう人。飯上生ハ兄の壁。軍水生ハその身の仇。あひの随ハ刺留。更とのへ  
 みねのあやをぬく。一義及ぶ。承諾に當下社平ハ膝を進めて番長の速



頻々嗟嘆と戦國流李の世とせども日月の照る少人の心虎狼と等しく  
良民を屠殺してこれを名づくは法度と善と惡とを誣て五逆と  
罵り惡と善とを故に奸曲を美と君子と稱をむ東海の孝婦誣殺  
せられて遂に三松の早懸り杞梁の妻の哭と忽地は城陷まり寛氏の  
天地を動かすその崇遠あり汝達ハ是斗筭の小人の計も足るものや後材狼と  
りて打城といふ大石殿の家風をかへくもあつた縁といふも果は簞人を怒れ  
眼尻逆立ち憎れ末期の擬廣言物といふをきくと床几を動かす焦燥獄  
卒小へ重括せし額藏が索の端と棟の秋と投けし力と任と釣擲れば足ハ  
倏忽と地をたれて六尺あり引登される背ハ輪と負るが如くあとに社平  
五倍二衣も袴も結取り褰げし身輕の打扮物ぐげふ龜甲入る膺衣と  
高脛露しと青竹の鎧と袂とを勢ハ猛く進み出く兩人齊に額藏を左右ハ

了と疾視し虐賊額藏天罰の如くといふ今や國土の爲ハ大犯人れは爲  
お大敵敵三年竹の短鎗の串刺受ふつと叫び痛くは額藏を屠  
舎の牛羊釜中の魚鱉三寸息絶れば萬事休人天日これがあは暗く油雲漢  
陌り走るが如く遙とこれと望るものハ潜然として目を拭み涙の芽が軒端の露  
落る玉水吹と疑ふ又樹下の土を潤と葉漏の露吹と怪むし介程は平  
五倍二合の竹鎗琉々と素突は素扱試つ左右齊に閃くと額藏が脇腹を刺  
貫んと刀頭を引く呀と被る声あり先ハ五十歩許東西の稻塚の陰ありと  
西方二度は射を響箭弦音と共に鳴渡る五倍二社平が肩尖へ揺一揺と  
立俱は矢所を外れども痛みはれば霎時も堪へ兩人苦と叫び鎗を肩に  
倒れる巷ハハあはれものやと驚だち立ちくとえればその箭ハ五六寸の紙  
牌を結提く奉納若一王子権現所願成就と書さるる原来真の征箭を虎

守を不て賊を愛はる百姓們が所為にあわん疾荒出して生拘れと聲あり攻りて下  
 知れはけあらと夥兵共東西に立ちまゝに猶塚目多く疾々と走り進んは様  
 射を神箭は皆紛々と射倒れて右往左往は辟易を周章勝てのさく次  
 當下猶塚推倒して頭れ出る兩個の武士東西一弓投捨く準備の竹鎗撥取く  
 清朗の聲高し茶毒の酷吏騷だせを額藏何の罪ある虎威を借て刑  
 罰と濫り私怨より忠義を凌虐は是汝が行ふ所神は怒り人の恨りされ  
 同盟の義は依て天を代々塗炭を拯ひ虎狼を獵く人心を快く作麼俺們を  
 何人とする本郡大塚以氏大塚信乃成考下總許我の浪人犬飼現八信道ホ  
 あわり。さあり。三箭も鎗も王子の神宝今汝が五毒の竹鎗との身はどこの身  
 返る觀念せよと罵責く鎗を捻く走免れは菴八のく駭騷だく敵ハ箭種の  
 喝さむ彼より竈て撃けと叫聲烈しく呼れは夥兵はこれに驚きれてよく林を

うら振る逆進む信乃現ハわめくを右に受左に柱く些も擬議は瞬間は五  
 穴の鳩尾中腕刺伏する菴八遙はこれとく敵ハ倭は兩人あれも獵雄當りか  
 禦だもあは額藏を奪ひ去らるゝあわん彼奴をさく結果て後をく  
 するをよけれと腹裡は尋思し遠る竹鎗を揚く遽く棟ののり近つて  
 ける折る忽ち後方よりあは酷吏菴八具く等大塚大飼同盟の死友犬田  
 小文吾涕順あはり首をさく呼苗る声は駭く菴八も阿と覺て飛揚る  
 運歩取次はる信乃現ハ一歳増く骨逞しく色白く肥膏つたる大男  
 本陣と結下る王子の竹鎗閃いて透間もく突立れば菴八を遽しく竹  
 鎗をとり受け拂ひ具く防戦は程は菴八が若黨と五六人の獄卒あはる物  
 ら振て共侶は援の撃倒さんと競ひ蒐る小文吾ハ物ともせは精神あはる  
 かりて難立馳立進みけりその間は信乃現ハ柱る敵をさひの隨は八方へ撃散

|   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|
| 法 | 脇 | 三 | 額 | 主 |
| 場 | 大 | 大 | 藏 | 人 |
| 子 | 士 | 士 | 王 |   |

伏餉現

額藏

五倍二



大塚

社平

大甲文吾





力を盡せし素より義の伏る所ありつやと思ふに死なば社平五倍二  
番八倍の残毒の竹鎗へ天理人望は違ふと和殿を害するにあらば彼れに還て  
竹鎗を縫れて命を損せしと王子の神罰をえられ曩は俺們相謀て和殿を  
搦んと欲せしは長番城あり王子村の河より農家より驚ぐ鎗と  
弓箭を買ひて大敵を殺し明き今やこの地は要なりととる田河をうら  
渡して鄰郡を退く誘ふと急ぎ額藏もく感佩して信乃現八ホを元  
立つ西北のへ足も走去るに六町も十町も過るけは浩大は塚より新隊の  
雜兵二十人塵埃を踢揚る追蒐するに郷を逃去る奴隷が城を還りてを  
報へ町進驚き疾行の雜兵よとの舞着を撃ちぬと頻に下知を傳へる  
食鳥銃を携へ既り城兵ホも四大士は近づき前來程する隨高  
頭を捕へ連掛て火蓋を切んとす打つ俄然とて降をぐた立の雨繁を

素より忽地火塊を滅るに城兵ホもあひあひ暴雨は度と失く且く打  
撃る程は果然と鳴る疾雷は電光に雨烈なりと城兵のうき  
騒ぐあま雨を避んと食樹下は立寄る頂の上は霹靂と天地は響く  
一声の雷火は震れて死するものなりと数とあはれ震死を脱れし  
共侶は氣絶して枕を伏する四大士再度の追捕は脱れしとあひうき  
四下の松を筆眉に取て身は濡る敵をあらは天雷の祐あり刀も用ひて  
夥の敵兵とびはるれば是れ九事わげを滝野川と王子の神を過るなり  
舟も武運を黙禱して齊一間道と走り戸田河を渡れば雷は雨も  
細く黄昏は近かりと前へ渡るとと彼此とを戦国の習俗  
を領主の嚴禁あれば渡船絶くや況く雷雨は水陸の人迹稀なる折  
りあま便船せんや船をえとつとを皆氣を回て東へ走り西へ赴



吾黨此の危殆とありし知れども神速微妙の援をえとて、  
あつちの八理りへ方称們にいぬ比ふ宿所を辭去りて南を望み赴きぬ。  
道の程心りてゑる不竊は迹を跟へ通し、方称們八社岡の隈に、  
ぬひたの折の密談を圖らざる竊は、みか同盟の義より額藏めを拯んと  
死せむ辭せざる武勇謀客滝野川を辨天堂を旅宿せんと相譚あり、その  
智その勇大なるを馬傑達なりといひ、認く憑く又慕ふ、  
おと宿所は環りて、あつち彼人へ額藏男を拯んと謀るも、城中の守禦  
嚴重なれば、獄舎に潜ひ近づくに竊せんとへる人なり、かれは刑罰の日  
計場を劫して奪りて走りんと謀る、あつち不敵の豪傑なり、本意を  
遂へハ必定なれども、其処より城へ遠くぬき、再々縣の追兵を驚かす、寡は敵  
に、縦追兵と殺崩し、日くへ走るとも近属の戸田河へ渡船稀なり、あつち

至りて追詰りし人、その折に拯ま可憎義士を殺せんとあひまされ、密々ふ  
滝野川へ赴き、その進止を窺ひ、又大塚へ赴き、刑罰の日を同定あり、  
船を彼処よりせり、方称們を俟とう、低頃の雷雨は黑白を別せ、方称們ハ  
あつちと水際を徘徊あり、けんとも知れど、且くも物とあせし、  
些遅々々敵は啖魚のれつて危なり、と村膳の心の滅々と決断せ、信乃現ハ  
小文吾ハのあつち感嘆と、措平が仕俠義胆を額藏に告る、  
感佩し、その恩信と、既にして船ハ梢北の岸に著る、  
然ハを演る、暇あり、措平をえり、皆再會を契り、  
介程は町進ハ士卒共侶を揚、頻に船を呼禁れども、舟人ハ、  
漕えをへくも、  
四五十名の岸に立並て、前継早は射被れども、  
間速なれば、  
山崎堂藏

落るもどく流れり町進ハこの光景はおもへ怒罵のくみかひあはれ共々卒で  
 夥残害と死刑の囚徒を奪去る唐賊を撃つ。偏くハられ尤も脱れと河幅ハ  
 いと廣けれと。あつとつハ浅瀬あり。な續けといひ被る馬を颯と乗入れ。早  
 雄の士卒六七十名。愈後と下と渡り。あれも夕立雨ハ河上より落と水あきたまを  
 高けれハ士卒ハ左右に渡り。或ハ弓と流ハ杖つて或ハ臂と連て相扶け推流  
 されと喘ぐ程ハ町進ハ只一騎馬と河の中央まで辛しと進る。猪平ハ遙に見る。  
 遠く船底より弓箭を取。能く固めく矢声と。ううと。丁と。殺せハ町進ハ  
 何人ハ飽深く。さぞと。さぞと。ハ。札。虎。裏。甲。と。被。さ。る。人。裏。袂。まで。至。る。ハ。極  
 投捨と進る。猪平ハ。の。箭。を。既。ハ。射。損。う。る。れ。ハ。只。顧。ま。あ。る。縣。て。二。の。箭。を  
 刺んと。程ハ。忽然と。一個の。壯夫。水中より。浮。望。町。進。が。於。上。ハ。挑。子。棒。を。楚。と  
 ら。被。て。仰。き。引。落。し。つ。腰。の。刀。を。技。平。く。押。へ。く。首。を。取。り。け。り。その。水。中。の

疾働死。目。さ。事。を。ど。ふ。さ。う。の。け。で。件。の。壯。夫。ハ。町。進。が。馬。を。奪。り。水。中。で  
 閃り。とうち。跨り。後。れて。渡。さ。ん。と。せ。雜。兵。を。挑。子。棒。を。以。り。倒。突。流。推。流。ハ。敵。ハ  
 忽地。壁。易。して。舊。の。岸。へ。逃。登。る。と。追。ひ。つ。馬。を。乗。上。う。る。が。ま。れ。ど。城。兵。ハ。水。に。濡  
 じ。も。陸。の。も。衆。皆。岸。に。踏。留。り。て。推。捕。籠。を。て。取。る。當。下。蘆。原。の。邊。り。あり。又  
 一個の。暴。夫。突。然。と。頭。れ。ど。く。も。横。鎗。を。入。れ。ハ。城。兵。ハ。亂。離。だ。く。乱。騷。ぐ。と。地。り。や  
 応。と。長。柄。の。鎗。の。刃。頭。尖。く。敵。伏。せ。判。殺。を。千。変。萬。化。の。働。也。ハ。勇。士。ハ。幾。々。兩。人。あり。  
 城。兵。ハ。既。に。大。將。を。撃。た。れ。ど。も。有。難。水。ハ。大。勢。多。く。退。く。も。あり。進。む。も。あり。嘯  
 叫。と。戦。ひ。つ。四。大。士。ハ。北。の。岸。に。この。勇。士。の。働。也。を。睥。て。さ。り。四。士。齊。一。感。嘆。し。て  
 水。際。近。く。船。を。歌。い。猪。平。を。呼。け。て。乱。る。世。の。習。俗。と。弱。を。助。け。て。強。を。折。り。使。氣。の  
 め。あ。は。れ。あ。つ。と。ど。老。人。の。ど。死。が。稀。か。る。彼。兩。個。の。壯。夫。ハ。何。れ。の。人。ぞ。と。人。を。ぞ。と。  
 あ。ぬ。俺。們。を。極。人。と。殺。仇。を。殺。し。て。大。敵。と。戦。ハ。光。景。せ。ハ。珍。し。ハ。勇。士。あり。



尺八

門進

小文五



力三郎

戸田河  
あけ  
四大士  
ゆき  
窮厄を免る

事情の更をあらわしと討くといふ。又、平徹笑く彼も、曩も昔より、力二郎  
 尺八の小人、既に老れ、けの削は相譚、血氣は早、ゆゑも、豊嶋、煉馬、両家の  
 為に、怨を復さんとあふ、あら、大塚の陣番、とて、憎むを甚、あら、異議なく  
 同意して、彼も、蘆原は、躲て、機は、臨、変は、心して、町進を、撃捕、う、信乃  
 小、驚、な、く、あ、又、彼、勇、士、命、を、惜、む、難、代、我、亦、多、恩、人、之、あ、り、更、ま  
 い、と、親、親、族、か、り、と、欲、づ、る、ふ、陣、殒、其、悔、も、甲、斐、加、し、の、歿、危、を、他、に、譲、り、て  
 苟、も、免、れ、ハ、勇、士、の、せ、る、所、り、と、俺、們、も、亦、これ、を、恥、その、船、を、疾、き、め、再、奮、の、岸  
 渡、と、生、存、と、も、死、者、と、も、安、危、を、彼、人、と、共、ま、え、今、う、躊躇、と、う、と、言、葉、等、く  
 急、き、平、頭、と、う、掉、く、否、この、船、を、寄、ま、く、義、を、く、勇、む、力、称、們、此  
 志、多、く、れ、も、彼、が、敵、と、戦、ハ、力、称、們、を、落、え、る、然、る、と、再、彼、へ、渡、く、俱、  
 陣、殒、あ、る、此、彼、共、み、か、益、が、く、と、わ、れ、社、校、共、町、進、を、撃、捕、あ、れ、は、深、入

して、遂、に、命、を、隕、し、や、せん、匹、夫、の、勇、士、是、非、を、れ、や、う、ち、棄、て、落、と、せ、れ、彼、も、小、人  
 只、狭、氣、を、旨、と、て、今、力、称、們、を、敵、あ、ら、ひ、世、の、豪、傑、と、あ、ま、り、命、は、換、て、頼、人  
 と、欲、づ、る、と、の、あ、れ、と、ふ、委、あ、る、と、状、を、音、音、に、届、け、彼、が、う、小、人、が、あ、る、  
 定、う、あ、る、と、今、力、称、們、を、渡、し、追、兵、を、傳、留、め、れ、は、神、宮、へ、還、り、か、こ、  
 況、彼、社、校、を、先、亡、と、あ、る、誰、を、便、著、立、潜、び、く、餘、命、を、何、処、は、貪、之、に、を、  
 限、り、の、浮、世、と、豫、て、覚、期、を、究、め、り、然、に、この、船、を、あ、ら、は、流、さ、バ、力、称、們、の、又、渡、し、  
 少、虎、ハ、敵、と、し、れ、は、船、も、共、身、を、論、赤、心、を、頭、に、下、り、あ、ら、と、ひ、け、と、  
 河、中、へ、漕、如、也、六、大、士、は、と、う、あ、る、且、感、一、且、驚、く、水、際、は、足、を、翹、て、や、等、の、平、  
 更、い、つ、と、趣、理、り、あ、れ、と、更、ハ、三、人、を、あ、る、死、何、地、へ、落、ら、る、は、あ、ら、と、わ、り、  
 枉、く、且、く、あ、る、と、異、口、同、音、は、呼、禁、れ、と、平、ハ、心、も、せ、河、中、遙、は、漕、退、は、豫、て  
 准、備、と、あ、る、船、底、の、柱、を、引、抜、捨、れ、ハ、船、ハ、底、より、水、入、り、人、を、乗、せ、く、忽、地、は

波の下を沈むける四大士は法然とる目届ぬ薄暮に戦ふ蘆の葉さへが  
 前面ハ修羅の大刀音矢叫びあそむ河風は澳より黎む宵闇の其処とも  
 るにわたりやうかきしやも四大士は捨て走ふ忍びどしとあけ然と立在一と  
 信乃ハやをくあひえし忽地は声を獎して時あつた命あつた必死を極め  
 俺們的西三度危窮を脱れてあひあひ猪平ハこの河中に投て死せし且西勇士  
 存亡も目今あひ定めて然ばと云云云この小節はわづらひく河原に立て曉は  
 死する人の返るあひ勇士を援け為すや猪平が俺們的はひ送せしや  
 ちや荒井山まで赴くと思ふるあひ誘ふ人々は通宵走りて異を  
 料んてと誘ひまれば現ハ亦小文吾も寔は然と領たる中ハ額藏ハ遙は  
 信乃とええく彼樊噲が大功ハ細謹を顧む大に小譲を辞せと欲ひしを  
 又バ猪平が水勇士のくむ惜む勝れども水を隔ててくちち歎けハ

それゆげは女々しく相愧て現ハ小文吾共保まうつれ立く野干玉の  
 闇のあれど猶も世をあらはるる若しあつた蔵のくちち赴けなり

第四四回

電電の社頭ハ四馬會話を  
 白井の郊外ハ孤忠雙言を窺ふ

走るのハ路を擇むる貪欲めあつた妻を擇むる貪欲めあつた食を擇むる貪欲めあつた  
 衣を擇むるの時に勢ひ人情をくくつたやうな程に信乃額藏現ハ小文吾も  
 上野信濃とて當るもの終夜間道より只當る走れども比ハ七月初の月黒白も  
 別ぬ鳥夜のあひ通て五里許りく加心地山路は迷ひ入りくくく程は天ハ  
 明らうとそれバあつたあつた高山の半腰よりあつたあつたあつた東細  
 帯の間よりして西北のくを直下せぬ寂る人煙廻るくくくあつたあつたあつた  
 山は荒る神社ありて華表は掲一匾額は雷電神社といふ四大字が定りあつた

讀れり信乃つくと瞻仰と諸賢へあひまひめやあは桶川の東南あす雷  
 電は疑ひや彼方よりあは人煙は是桶川の郷ありきあはひきあはくも庚申  
 塚のあはき神雷の落りき夥の追兵を拉れは世は掃ゆる天恩をかくて  
 昨夕は迷ふ今夕も雷電の社頭より天の明は因り縁あり奇なりと  
 公は有理と額藏も三士も齊一瞻仰し且感し且尊し石湯を掬ふ朝浄水もく  
 社壇も額つる俱は祈念を凝しけり且て四大樹下は退き又彼此と見えは  
 神社の背は桑樹より菜更揚梅も少くぬみあはく熱して半は落る恥と東と  
 菜更を採て飢は充る不甘を九常は過だる忽地は疲勞を忘れて心地清き  
 ぬぬや山腹はあつ朝日の影遅れは樵夫牧童やもか舟遭は鳥は緑樹に  
 隠れて声の高く雲は青赤も起りて追ひも定らば現静けは山の徳なり  
 名山靈峰はれはれは時よりその佳境を皆共侶は嘆賞して或は石を凡とけ

或は朽幹は身を倚て送は相譚ひ慰めけり當下額藏は恭しく貌を改てさのす  
 夏のはれとて曲は秋はと演ひぬぬや人迹稀に密談は究竟なりぬぬや物體を  
 盡ひて犬塚ぬぬや何の故は許我は留りぬぬや況天田大飼の両友は又相伴て某  
 必死の厄を極ひぬぬや為体不思議とのやあはりありぬぬやぬぬやぬぬやぬぬや  
 信乃は含咲てあはりぬぬや理り某も亦許我ぬぬや免れぬぬや大厄ありぬぬやの故は下総の  
 行徳は流浪のゆゑに危るる幸なり三四の豪傑身命を擲て遂に窮死を  
 釋れぬぬやその故は箇様々と被村雨の刀に失せぬぬや又現は組敷ぬぬや滾て飛は  
 落るる文五兵衛と小文吾ぬぬや妙真房夫婦がぬぬや大八の大江親兵衛ぬぬや大  
 法師と蜷崎照文ぬぬや伏姫の縁故珠数のぬぬや八房の犬ぬぬや安房の里見は宿因  
 ぬぬやの縣略をたし示ぬぬや現は小文吾も近代ぬぬやの漏るるを補ひぬぬや額藏は又ぬぬや毎ふ駭  
 然として驚に潜然として歎く房八が義烈ぬぬや親兵衛は幼穉ぬぬや犬士は

一人を喜ぶといふは、○ざんぐをあつた文五兵衛、妙真が心操の大事をなぬと嘆賞して、  
 声を出して、大が二十餘年の行脚の勤苦又照文の母の爲に徒弟照武が子なり。  
 と宿縁を感悟して哀歡交々禁せむといふ亦現八小文吾が孝順義勇を春  
 愛しての骨肉の如く受り、その死信乃又の事其行徳をあま一日八舊里の凶  
 變を夢やとも知らぬが竊に和殿は對面して事の趣を報へて大飼生共侶は船で  
 大田を送りて神宮の岸は著し折漁者猪平は呼出られ、そとを伯母夫婦の  
 横死と和殿の忠勇非法の禁獄詳は使ふより、それは大飼天田と密談して滝野  
 川あり辨天堂は七日計参籠と云云と謀りて遂に和殿を拯ひ、何物もなぬ  
 尺八力二郎とやうに援あり既ちと恙なく四支面を接ぎ、秋ひ何物もなぬ  
 べにあら里見殿あり、微聘の沙金、蜚崎主の懇意の隨は某且く預り、  
 受納め、いひ、懐け、財布を撈り下包の沙金をと、  
 額藏ハ謹く受て、左右の袖に某の事、里見殿は一介の功なり、和君達  
 工を属日あり、某が故を、纏腰の貴刀、是より後進退は和君達と共に  
 生は辞ひ、いかに云云の、後より己に、諾ひ、その功、皆、和殿、賜  
 物を、いかに、預措、死の、後、纏腰、を、達、は、相資、人の、財、を、分、つ、と、  
 と諭し、額藏ハ遂にその意は仕、沙金を懐に、挟つ、いかに、嘆息、し、現、只、今  
 玉の文字は、あつた、我、と、過世、似、る、め、八、あ、り、死、に、大、江、氏、の、子  
 くの、小、既、り、五、人、就、て、又、一、奇、計、り、曩、は、某、ち、大、圓、塚、山、の、内、を、二、個、の  
 犬、は、撞、見、る、その、故、ハ、如、此、と、信、乃、は、栗、橋、を、別、れ、日、十、住、り、日、の、暮、に、

八代傳五車卷二  
 十七  
 山崎堂藏





犬は縁ある時、且力二の両字を轉倒せし、便是方とある、又凡の字の上をよれば、  
 便是凡の字なり、又元と全聚れば、房の字とある、あつたや、そ凡の字を房の  
 上を冠せれば、八房の三字とある、強牽傳會は似れども、亦是犬縁ある、凡の後  
 は、因縁の定う、あつたや、今之急務にあふれば、且度外は措ね、以意添  
 妙論は、小文吾、さう額藏、現も只官は感服とて、その才幹を稱する、さう又  
 額藏、腰刀を右よりとて、これを信乃は示して、あつたや、さう、度申場のほり、あつた  
 犬飼生の精悍、社平が両刀を分捕して、某は脱り、あつたや、紉糸の折れ、さう  
 心づかう、今朝とて、さう、今この腰刀は、比栗橋の宿り、さう、和君に  
 せせ、あつたや、桐一文字の名刀といひ、六月十九日の夜、簀上宮六を撃、さう、五倍二  
 疾を負せ、この腰刀を、さう、某囚徒とあり、比社平が掠奪、さう、あつたや、又  
 循環して、某はさう、落、さう、亦是、奇といひ、あつたや、あつたや、この桐一文字は、和君の祖父

匠作ぬ、先祖相傳の名刀とて、遺傳、さう、授、さう、來歴、云々と定、さう、あつたや、  
 和君の、さう、茂陵の千金、これ、さう、何、さう、某、さう、社平が、さう、口、さう、  
 事足れり、被村雨の名刀、道節、さう、落、さう、今請復、さう、あつたや、和君、讓、さう、  
 らん、藏、さう、さう、信乃は、欣然とて、左右の、さう、受取、さう、あつたや、義、さう、  
 犬川生、さう、伯母附属の、さう、刀、さう、當座、さう、仇、さう、撃、さう、あつたや、義、さう、  
 危難の、さう、折、さう、大刀、さう、喪、さう、あつたや、腰刀、さう、さう、行徳、さう、著、さう、日、さう、腰、さう、寸、さう、鐵、さう、帶、  
 ざう、と、大田生、さう、あつたや、所藏の、さう、両刀、さう、贈、さう、あつたや、五倍二、さう、撃、さう、あつたや、銳、さう、鈍、さう、を、  
 試、さう、あつたや、現、さう、授、さう、さう、銳、さう、刀、さう、鞘、さう、金の、さう、臥、さう、龍、さう、あつたや、又、さう、紫、さう、金、さう、魚、さう、子、さう、金の、さう、雪、さう、條、さう、を、さう、置、  
 なる、さう、の、さう、両刀、さう、の、さう、表、さう、装、さう、一對、さう、既、さう、この、さう、両刀、さう、あれば、さう、事、さう、足、さう、さう、と、さう、桐、さう、一、さう、文字、さう、は、さう、先祖、さう、の、さう、重、さう、宝、  
 有、さう、繫、さう、さう、捨、さう、さう、あつたや、厚、さう、意、さう、は、さう、仕、さう、て、さう、この、さう、腰刀、さう、と、さう、相、さう、換、さう、て、さう、背、さう、に、さう、帶、さう、べ、さう、さう、あつたや、さう、さう、さう、さう、  
 進、さう、せん、さう、納、さう、め、さう、と、さう、首、さう、に、さう、腰刀、さう、を、さう、贈、さう、り、さう、さう、れば、さう、額藏、さう、に、さう、受、さう、と、さう、さう、の、さう、眉、さう、根、さう、と、さう、あ









君父の怨を復さんと謀るゝとわかれ彼を推量する大川生が見る武士へ  
道節の疑ひを誘ふ下向して白井の邊は趣々萬一彼人は環ふともあつた  
とくくと急せむ莊助現八文吾へ一議及ぶ同意して身起つ又領地をわつた  
立ち足利の山本見えく加得遠に千々の石階落もが如く足信して下向せり不題  
管領扇谷修理大夫定正近属山内頭定と不和ありやう猛に鎌倉を退けて上野  
白井は在城を當國より信濃越後定正の米地を多く人馬を調煉して  
不慮に備へる為めなりこれより定正は五日の早且あり砥沢のふは狩競し  
明の日の申の比は白井の城は同旋を定正の日の打扮ハ紋紗の狩衣は精好の袴  
豹皮の行膝穿て金作の大刀は虎皮の尻鞘をさる腰は跨へ八分反の武者笠を  
戴けく奥州驪の太逞馬は紅の厚穂掛く磯馴松は月と衡を銀の磨白は  
鞍四下羞明く皆果して紫の豹操練つ馬優は歩行せり相後近臣ハ  
巨田新六郎助友龜門三宝平五行妻有六郎之通松枝十郎貞正示徒類凡  
二十五名外様の若黨五十餘名又弓箭鳥銃を肩おせ雑色奴隸に至てハ  
毛舉るは違あつた殿の列卒は野豬鹿をどくくの獲物を扛擔しあつた  
前駟後従の目さゆく五町あり續けけも既に定正主後ハや白井の  
城をハ二十町は足らぬ道の程の並松原を過る折とそれハ一個の武士の浪人  
皂蛇皮絹の単衣の申時なりめを被く編笠をありあつた年の齡は定正の  
道のゆくての左のくちを年より松の下の葛石は尻をけり右のくちを口の  
大刀をやと膝は推立て忽地声を喚立く世に千里の馬をけりあつた只それを知る  
伯樂泥の今も鑢邪が劔をけりあつた只それを知る良將の泥の惜みかこの名  
刀屠兒の肉俎は乗せられハ農婦は鍋の炭を掻き入恨むとく返し又かへ  
しと頻るしあつたける前走の雑色兩三人ハ見え航て立あつたあつた奇怪あり



定正途ぬ  
近習をしと  
賣人の人む  
向ふ





